

# 松山櫨便り

## 第21号

購読  
無料

1日・15日発行・櫨に関する情報求ム!

福岡県久留米市田主丸町で活動中!

編集・発行

松山櫨復活委員会

幹事・矢野真由美

耳納山の片隅で失われてしまった櫨紅葉の景観を復活させることを目的に、櫨の素人がまったりとその様子を伝えていく会報です。

ブログ公開中「松山櫨復活奮闘日記」 <http://blog.goo.ne.jp/elster/>

連絡先 e-mail : [elster@mail.goo.ne.jp](mailto:elster@mail.goo.ne.jp)

ホームページ「松山櫨復活委員会」

近日公開予定



和紙にイグサを巻いた芯

## 和ろうそく芯物語 その1

# なぜ和ろうそくはイグサ芯を使うのか

### イグサ芯に注目してみた

松山櫨の接ぎ木が落ち着いたので、今回から和ろうそくの芯について連載します。

和ろうそくの芯は、普段よく見かける西洋ローソクの芯と違い、

前号までのあらすじ

江戸時代に田主丸町森部で発見された櫨の優秀な品種「松山櫨」。朝倉市に一ヶ所だけ残っていた松

山櫨を、故郷である田主丸に復活させるため、接ぎ木を行い、一本だけ活着に成功しました。今のところ、なんとか育てています。

糸ではありません。イグサと和紙で出来ています。イグサは湿地帯や浅い水中に生える植物で、ゴザや畳の素材として利用されることはよく知られていますね。

また、別名「燈芯草」(とうしんそう)と呼ばれる言葉からわかる通り、和ろうそくの芯に、このイグサの茎の髓を使うのですが、私が実際に芯を作る職人に聞いたところ、和ろうそくの芯に使うイグサは、茎がもっと細い品種のイグサを使うのだそうです。

### 蜜蝋には麻の芯だった

ところで、和ろうそくには、なぜ糸ではなく、わざわざイグサと和紙を使うのでしょうか。和ろう

そくの歴史を遡ってみると、「大安寺伽藍縁起並流記資財帳」という記録の中で、養老六年(七二二)に天正天皇から賜った品目に「蠟燭」という記述があります。この頃のろうそくはミツバチの巣から採取する蜜蝋で、芯は麻の皮を剥いた後の茎、いわゆる「おがら」が使われていました。当時のろうそくは、全て中国からの高価な輸入品だったのです。

戦国時代になり、国産漆蠟燭が出回るようになるのですが、いつ頃からか、麻ではなくイグサが使われるようになります。

### 高い要求へ応えること...

もともと日本では、昔からの様々な伝統技術が証明しているように、人々は、より使いやすく合理的で美的なものを作る「智慧」を蓄積し、高い要求に応えてきました。電気のない時代に、ろうそくに対する要求が、いかに高かったかは容易に想像がつかますね。そう考えると、なぜ糸や麻の芯で



左が和ろうそく(大興製)、右が普通に出回っているローソク

はなく、わざわざ和紙とイグサの芯を使うのか、その理由がはっきりと見えてきます。

右の写真をみてください。肉眼で見ると、和ろうそくの方が三倍は明るいです。炎の形も、和ろうそくの炎の先端が美しく三角形になっているのがわかると思います。西洋ローソクの炎は、平行に伸びていますね。

この炎の明るさと形こそ、和ろうそくの美であり、江戸時代の人々がこだわった部分です。これには、「櫨の実から作る蠟」ばかりでなく、イグサを巻いた「芯」が大きく関わっているのです。

続きは次号にて

※本会報を許可なく複製・転載すること、または部分的にもコピーすることを禁じます。